

—子どもの日記から—

時間をかけられた作文指導

第三回目—満君の日記から

下田小の次に、私が長く勤めたのが、王寺北小学校でした。王寺駅の周辺が校区であり、学校は校区の東端にある舟戸山のふもとに位置していました。王寺小学校から分かれた歴史の浅い学校です。

その校区にある王寺駅前のビルは、以前は「王寺ファミリィ」と呼ばれていて、「ごおう」というステーキハウスがありました。そこで、どうしても食べたかった五千八百円のステーキのことを満君が二回にわたって書いてきました。ただ、これだけのことですが、「おいしかった」で終わらない文章になっています。

私が子どもの頃、たまに家族で外食に出かけることもありました。他人の食べている料理がどうしても気になってしまい、「そんなん見るもんちやう」と、親に注意されたものでした。しかし、横の席で高価な料理が来ると、どうしても気になります。その時の様子を満君は見事に表しています。お父さんの言葉も大変おもしろいです。そして、やっと念願かなって食べられる五千八百円のステーキ。おいしかった様子

が二回目の日記からはうかがえます。

□「ぼくのじまん話」

五年 満

ぼくの夢は、ファミリィの「ごおう」で、五千八百円のステーキのコースを食べることだ。時々、昼にあまり高くはない「ひらめ定食」か「ステーキランチ」しか食べないので、一度でいいから五千八百円のステーキを食いたかった。この前も、定食を食べに行くと、横でうまそうな、どでかいステーキを食っていたやつがいた。

「若いのになまいきや。」とお父さんが言っていた。

でも、それがまぼろしの五千八百円のお肉だったと思う。ぼくは、いやしそうな目で、横を見ながら食っていたら、お父さんが、「そんなに食いたいんやったら、正月に食わしたるわ。」と言った。今週の十五日に食べる予定だから、早く食べたい。

1998/1/17

□「やっぱりうまい」

五年 満

ぼくは、この前から、かなり高い五千八百円の肉を食うやくそくを、お父さんとお母さんとしていた。本当は、一月十五日に食う予定だったけど、一日早く、十四日に食べられることになった。

一月十四日のばんに「ごおう」に行ったものの、その日はファミリィが休みだった。(なんでこんな日にかぎって休みやねん。) と思っていらした。その日はけっきょく王将でごはんを食べた。

次の日、今日こそはと思い、朝飯ぬきで昼に行くことにした。その日は、店も開いており、店の中もこんでいなかった。ぼくは、(よかった。)

と思い、例の肉をたのんだ。

すると、どでかい肉が出てきて、ぼくの目の前で焼いてくれた。アルコールみたいなものを出してきて、それを肉にかけると火がポオツとあがった。焼いていると、いいにおいがしてきて、急におなかがあがってきた。さいころみたいに切って、それができあがったら、食パンの上においてくれた。その肉を食ってみると、むちやくちやうまい。肉を食ったら、土台のパンも焼いてくれたので、ぼくはそれも食った。

最後に、肉を焼いてた人が、「住所を紙に書いたら、二月にいい物を送った。」

と言ったので、ぼくは住所を紙に書いた。それが何なのかかなり待ち遠しい。

それにしても、かなりうまい肉だった。

1998/1/23

私は満君を二年間受け持ちました。私が教師になったころは、担任は二年間持つことが常であり、その間、クラスがえもなく、子どもと二年間一緒に過ごすことができました。それが、今のように多くの学校で単年度の担任になったのが、子どもの荒れ、学級崩壊が報じられるようになった一九九〇年になったところからです。(持ち上がったとしてもクラス替えがあり、クラス全員がそのまま二年間同じクラスとい

うことはありません。)

二年間もあって、うまくいくケースはいいけど、うまく行かなかったら、担任はつらいので担任を替える、クラスも替えるようになりました。また、できるだけ多くの教師に教えてもらう方が子どものためになるという考えもあり、今のような単年度の担任という形になりました。二年間の持ち上がりの良さを経験してきた私からすれば、とても残念なことだと思っています。持ち上がりは、二年間でゆっくり子どもを見ることができます。一年目でうまくいかなかったら、自分の至らなかつた部分を、次年度では違ったやり方で挑戦しようという気になれるからです。

満君のような日記を書けるのは、二年間かけた日記指導のおかげだと思います。かつて、月曜日の一、一限の国語は、「国語」と時間割に書かず、「作文」としていました。作文をいつも書かせるのではなく、半分以上は子どもの書いた日記を読ませていました。作文コンクールに選ばれるような、教師の推敲がいつぱい入った作品ではなく、今紹介しているような楽しい作文を読んであげます。すると、子どもは自分の経験の中から同じような経験を引き出していきます。書くことを苦手とする子どもも、「これなら書けそう」と思うのでしょうか。日記や作文は書けるようになってくるものなのです。本を読んだり、子どもの日記や作文を読んだりして一週間が始まりました。作文の時間をしっかりとることでできた当時をなつかしく思うの

です。

(続き)

記述が変わった教科書

⑥遣唐使の廃止

これまで、「白紙(894)」にもどそう遣唐使」という語呂合わせで遣唐使廃止を教わってきたし、教えてきました。遣唐使廃止によって仮名文字や「源氏物語」「枕草子」などの文学作品、大和絵など、日本独自の文化が生まれたとされたのでした。

平安時代の前期、菅原道真が遣唐使の大使に任命されますが、唐の政治の不安定、渡航の危険性などを理由に、朝廷に再検討を促します。「遣唐使は廃止する！」と誰かがきっぱりと決めたわけではなく、自然と派遣計画が消滅していったので「廃止」という言葉を使われないようになったようです。その後、道真が左遷されて太宰府に流されたり、唐が衰退したりする中で、実行されなまま、遣唐使はなくなっていくたのです。

しかし、当時は唐の商人が貿易で日本にやってくるので、航海しなくても唐の文化を学ぶことができました。それで、「遣唐使の廃止」と言う表現が「遣唐使の停止」や「中止」に変わっています。教科書では、「停止」という文言を使い、次のように表記しています。

独自の文化の発展

中国との交流により、日本では大陸風の文化がさかんでしたが、894年に遣唐使が停止さ

れました。しかし、その後も中国から貿易船が九州にしばしばやってくるなど交流は続き、中国文化のえいきょうを受けながら、貴族のはなやかな生活を通して、これまでとはちがう独自の文化が発属しました。

以前の教科書であれば、遣唐使廃止が日本独自の文化を生み出したことに力点を置いた教え方でしたが、遣唐使が中止、停止されても、日中の人とモノの交流は続いていたので、今ではこのような表記になっています。

おうちノートから

ご意見ありがとうございます

☆授業(社会)にそって自ら進んで復習をしている姿を見て、成長しているなと思います。自分の興味のある物だけでなく、苦手な教科にも進んで予習・復習してくれていけばいいなと思います。わからないことをスマホなどで調べるのではなく、辞書をひくことを、もう少ししてほしいと思います。

*全くその通りだと思います。国語の単元では、はじめに通読して、分からない語句は自ら辞書を引いて調べていたものです。各自が家から辞書を学校に持って来ていました。ところが、今ではなかなかその時間が取れずにあります。今は遅れた分進まないといけないので、辞書から完全に遠ざかっています。そのような時間は大切であると思いますので、今後時間を見つけて行いたいと思います。